と「沈黙」について[これは「真善美=リアリティ まとめ」(三二一頁)のための参考資料である

編集者

Q じさせたいという心性を共有しているのが世の詩人たちではないでしょうか? 名『音、沈黙と測りあえるほどに』にもじって、「言葉、沈黙と測りあえるほどに」を真底実現できる言葉は そんな思いが痛切に感じられます。 ないことを誰よりも知悉しつつ、それでも言葉の力でもって、リアリティに何とか迫り、その実感を読者に感 「詩の言葉」が確かに最右翼ではないかと思います。言葉が事実そのものではない、そして真実そのものでは かつて世界的作曲家である武満徹氏が書かれた、哲学者を思わせるような深い思索の結晶である名著の題 言葉の問題を根底から問えば、それは必然的に詩の言葉へと向かっていくと思われますが 谷川俊太郎氏の次なる詩には、

さえぎるな

私と海の間を(旅4)

るものとして、言葉の世界を忌避している様がよく分かりますね。 神話」の中に紹介されている詩の一節です。この短い詩の言葉からして、谷川氏は言葉が世界から人を遠ざけ これは、 評論家三浦雅士の珠玉の谷川論である、『私という現象』 に載せられている「谷川俊太郎と沈黙の

致で描いてくれています。 という一人の詩人の真情を見事に解き明かすとともに、谷川を通して詩の言葉が有する特性を迫真力のある筆 「谷川俊太郎にとって、言葉とはひとつの不幸である」との一文から始まる三浦氏の谷川論は、 谷川俊

思えば、沈黙と測りあえるほどに言葉を発していかねばならないというのは、谷川氏のみならず詩人が持

ち合わせていなければならない絶対的資質であると言えるのでしょうか?

もの らして、とりわけ詩人は容易ならざる緊張感をリアリティ、世界との間で、沈黙を介してもたなければならな はい。 抽象概念をもってその特性とする言葉の世界 でもって描写していこうとすること自体に大いなる困難さがあることを指摘しています。このことか D教授も言葉とリアリティについて触れていく中で、リアリティという具体的な経験の世界にある これは専門用語にとどまらず言葉一般にあてはまる

いと言えます。 していくか、ここがすべての詩人たちの苦労のしどころですよね。 うん、問題はここからでしょうか。すなわち、沈黙を介した言葉とリアリティとの関係をどう言葉で表現

てもいいほど、あらゆる角度から牛を描出していきます。中でも私のとりわけ好きなフレーズを紹介してみま ではないでしょうか? 高村光太郎氏の詩に私が好きな「牛」という詩があります。この詩は牛の百面相と言っ そうでなければ詩人をはじめとするあまたの言葉を紡ぐ人間たちの行為は徒労に終わると言わざるを得ないの アリティを全身全霊でもって感得できる磁場に触れさせるところまではたどり着くことはできるのではないか、 リアリティそのものを言葉で表現することはできないものの、沈黙を包み込む滋味豊かな言葉でもってリ

魂の影に魅せられない 見よ 牛の眼は叡智にかがやく 内を見ると一緒に外が見える 眼に角をたてない 牛の眼は聖者の眼だ うるおい のあるやさしい牛の眼 その眼は自然の形と魂とを一緒に見ぬく これは牛にとつての努力じやない 牛が自然を見る事は牛が自分を見る事だ 牛は自然をその通りにじつと見る まつ毛の長い黒眼がちの牛の眼 牛にとつての当然だ 形のおもちやを喜ばない 見つめる 外を見ると一緒に内が 永遠を日常に きよろきよろ

(『ユーモアについての43章』)

紹介します。 牛の眼についてこれほど見抜いている人はいないのではないでしょうか? もう一つ私の好きなフレーズを

牛はもうと啼いて その時自然によびかける 自然はやつぱりもうとこたえる (前掲書)

この感動は自分だけの胸にしまっておくのはもったいないと思い、 牛と自然が呼応している様、牛・自然が一体となった姿。とにかく私はこの詩の魅力に取り憑かれ 同僚の教師をはじめ授業を通して生徒にも ており、

ち込んでいる人が時にいるものですが、インド学研究者である松山俊太郎氏もその一人です。 究家として有名ですが、『インドを語る』の中で、次のように述べているくだりがあります。 ほど光彩を放つ生き物は他にない、まさに前代未聞、空前絶後と言っても言い過ぎではないと思います。 世界中で牛の詩はあまた作られているのではないかと思いますが、おそらく高村氏が描いているところの牛 ところで、世の中にはあっと驚くような、通常では考えられないような粘り強さでもって一つのことに打 松山氏は蓮の研

やっていくうちにだんだんと伸びてきて、いまは、ひとりでやれば十万年くらいかかる、という気がしています。 わたくし自身、蓮のことをはじめたときには、こんなものは二十年もあればカタがつくと思っていた。 しかし

ち向かい、その時々において適切な対応をしつつわれわれは身を処していかなければなりません。そういうわ 続によって成り立っており、即座の対応を迫られる場面が数多くあることも事実ですね。そのような現実に立 しにする過ごし方は、 われの生の厳然たる事実を前にすると、松山氏の研究姿勢に象徴的に見られるような、 松山氏の、 蓮の研究に向けるエネルギーの凄さには感服するばかりですが、 一般の人々の平均的な生き方には、残念ながらそのまま適用できそうにはないですね。 われわれの生活は通常行動 時間を無限に先延ば